

和泉式部説話について

田 中 幸 子

はじめに

平安朝女流歌人、和泉式部は、紫式部、清少納言など同時代に生きた女性に比較して、きわめて好色性の強い女性として有名である。『和泉式部日記』『和泉式部集』などから、彼女の実生活をかいま見ることができるが、これらから「好色」のイメージをうけるのは確かである。

しかし、説話の世界では『日記』『歌集』にはみられない多種多様な式部が登場する。特に仏教説話集では、信仰・往生の例話として取り上げられ、「好色の女性」のイメージをうまく利用しているように思われる。

本論文では、多数存在している和泉式部に関する説

話の変遷、分布をまとめ、特に仏教・神道関係の話を中心に、なぜ和泉式部が説話に取り上げられていったかを考えてみたい。

和泉式部に関する説話を整理すると八表一〇（折り表参照）のような分布になる。この表は『日本説話文学索引』や『平安朝文学事典』を参考にし、また『群書類従』『日本歌学大系』の索引などをもとにまとめたものである。表の縦の欄には、話を採取した資料を「説話集」「歌論書」「寺社縁起」「物語」「歌集」「謡曲」と、それぞれの分野別年代順に配列した。成立年代は市古貞次編『日本文学史年表』によった。しかし、記載されていないものは『群書類題』なども参考にした。横の欄には説話の主題別項目をあげ、Ⅰ和泉式部の第二の夫である保昌関係の説話、Ⅱ娘の小式

部関係の説話、Ⅲ道貞・赤染衛門などの人物に関係した説話、Ⅳ歌人としての式部を評した記事、Ⅴ式部の信仰を中心とした仏教・神道関係の説話、に大別した。以下このⅠⅡⅢⅣⅤの内容とそれぞれについて考えられる特徴を順に述べることにする。

I 保昌関係説話

藤原保昌は、道長の長男、頼通の家司だった男性で橘道貞の次に式部の夫となった人物である。大和守、丹後守、摂津守を歴任し、受領階級としてはエリートであった。説話の世界では「大盗人椅垂^(せう)」の事件など有名な人物である。

この説話群の特徴は、式部の説話全体について言えることであるが、歌集の詞書から創作したと思われる話が多いことである。

たとえばⅧ表一Ⅰ①「ものおもへば」の歌に関する説話は、『後拾遺集』『式部集』にある

もの思へば 沢の螢も わが身より

あくがれいづる たまかとぞみる

から生まれたもので、比較的多くの資料にとられている話である。その変遷を年代順に追ってみると、保昌

関係説話に共通の変化がみられる。

最も成立の古い『後拾遺集』には「男に忘られて」いる頃、貴船神社で詠んだとだけ記されているのだが、『古本説話集』では「保昌に忘れられ」ている頃の歌、『三国伝記』になると「保昌にすさめられ」て、その祈りの為に貴船に来るという設定に変化し、はっきりと保昌の名があげられてくる。そして、男にふめたくされている式部の状態を描こうとする方向に変化してくるのである。

この他にⅧ表一Ⅱ②「ちはやぶる」の歌に関する説話も保昌の冷たいしうちに悩む式部を描き、保昌関係の話は全体に夫婦関係の不安定さを持っている。保昌との実際の夫婦関係については、はっきりした資料がなく、説話集や物語草子類の方が、事実か否かは別として、かえって詳しく述べられている。当然、伝播者の創作が大部分であろうと考えられる。

では、なぜ式部は夫にふめたくされなくてはならないのか。私は式部と宗教とをむすびつける前提条件の一つとして、夫婦関係の破綻があったと思う。

式部の説話は、和歌功德の考え方を中心に仏教説話の傾向を強くしていく。式部が、仏教に心を寄せるには、何かきっかけが必要である。その一つが、ここで

述べた保昌のつめたいしうちであると考え。一方ははなやかな、うわさの高い宮廷歌人、また、一方は勇猛な中産階級の男性。その二人がむすばれた。しかし、いつしか二人の仲もさめて、女性は宗教に救いを求め、ついには浄土への道がひらかれる。うわさ話の題材には絶好のものだったに違いない。

このように保昌に關した説話は、式部が保昌にすてられそうになるといふ設定を多く使っている。そして時代が下るにつれ、その傾向は強まり、物語草子、寺社縁起においては、宗教帰依の前提条件の一つとなっている。

Ⅱ 小式部關係説話

この説話群は、若くして死んでしまった娘小式部との死別の悲しさを題材にしたものが多く、他の説話群と違って好色な女性を強調するのではなく、母親としての愛情を感じる説話群である。その意味では特異な存在であり、それゆえに他の人物の説話（たとえば小野小町説話）とは、違った感をいだかせる。

前述の保昌説話が宗教と式部をむすびつける前提条件へと変化していったように、この小式部説話も式部

が宗教へ走る理由の一つとしてあげられる。

小式部關係説話の中で／＼表一／⑥「大江山」の歌に關する説話をのぞいて、⑦「いかにせむ」⑧「もろとにも」⑨「とどめおきて」の歌に關する説話は、それぞれ歌を中心においた、小式部の死に關連した話である。どれも式部の母性愛が主題であるが、これを草子類、寺社縁起といった後代の作品は、仏教帰依の導入部分として使っている。

たとえば⑦「いかにせむ」の歌に關する説話について考えてみる。これは病床の小式部の歌、

いかにせむ　いくべき方も　おもほえず

親に先だつ　道をしらねば

に感動した神の力によって、病がなおる話で『十訓抄』『古今著聞集』などの説話集や『誓願寺縁起』『小式部』など、広いジャンルにわたって所収されている。

この四資料を比較すると、そのとり入れ方に変化が生じてくる。説話集は、和歌功德の立場から、小式部の歌の靈力を、不思議な事件を客観的に述べる事によって表現しようとしている。奈良絵本『小式部』は説話集の記事をベースに、少しずつ脚色を加え、母子の愛情に重点を置いた展開になっている。『誓願寺縁起』は前二者と違い、願いもむなしく小式部は死んでしま

う。これは縁起が「小式部の死」うき世の実感を印象づけるような話の展開を望んでいるからだと考える。

このように小式部説話は、保昌以上に和泉式部と宗教を結びつける要因となっている。そして、ここで表現されている母子の情が仏教説話の中で、式部の好色性を打ち消し、浄土へ導く、確かな手助けとなっているように思われる。

Ⅲ その他の人物関係説話

さて、Ⅰ、Ⅱ、において第二の夫・保昌、娘小式部の説話について考えてみたが、ここではこの他に式部に関係の深かった人物についての説話の特徴をあげてみたい。

その他の人物というのは、同僚であり『栄花物語』正編』の作者であるとされる赤染衛門、悲しい恋の相手、為尊・敦道両親王、第一の夫・道貞の四人である。これらの人々は前述の保昌、小式部ほど多くの説話集には所収されておらず、庶民の文学である説話からはなれた『栄花物語』や『式部日記』などの世界で扱われていた。

説話集の中でも『三国伝記』の平仮名本は例外的な

存在で、この四人をすべてひとつの説話題目のもとにまとめている。これは平仮名本『三国伝記』が、「和泉式部詠歌の事」と題して式部の男性関係を歌を中心に年代順にあげ、最後は保昌と幸福になる場面で終るように描いているからである。その為、以前の説話集が主題別に一人の主人公の話を別々に所収していたのに対して、物語のように一人の人物の伝記形式にまとめるという、いわば説話から草子への過渡的傾向を持っていると考えられる。

Ⅳ 歌人としての式部を評した記事

この項は、説話とは言えないが多くの歌論書などにみられる式部の歌に関するものとして別記した。歌論書類は、その目的の通り式部の歌人としての業績の批評がおもなテーマになっている。中でも一番多いのは「暗きより」の歌に関するものである、式部の多くの歌の中で特にこの歌が取りあげられているのは、やはり説話の多さと関係が深いように思われる。この事はⅤ―④「性空上人関係説話」のところできわしく述べたい。

V 仏教・神道関係説話

I、II、III、IVと独自の分類によって述べてきた。それぞれに説話の中に同化した式部の姿を感じさせられるが、最も特異性を示しているのは、これから述べる式部の信仰に関する説話であろう。いままで述べたI~IVをもう一度見なおしてみると、仏教・神道の影響をうけているものも少なくない。好色の歌人と信仰との結びつきは不自然であるようにも思われるし、また、純真な心を持っていた女性という見方からすると、うなずける部分もある。

ここでは各々の説話別に内容を分析し、なぜ信仰と結びついてきたかを述べたいと思う。

①性空上人関係説話（表一①）

和泉式部の最初の勅撰集所収歌

暗きより暗き道にぞ入りぬべき

はるかに照らせ 山の端の月（『拾遺集』）

を基本として発展していったと思われるこの話は、数多い式部の説話の中でも特異な存在である。所収している資料の多さと、ジャンルの広がり、また、内容の

多様さは他の説話にくらべて、より興味をひきつけられるものである。

この一連の説話を、和歌批評型、性空上人の導き型（袈裟下賜型、参詣型）に分類し、それぞれの内容を説明する。

(1)和歌批評型

『俊頼髓脳』などの歌論書群で、「暗きより」の歌の善し悪しや、赤染衛門との比較をテーマにしている。この型では性空上人の事など歌を詠んだ経緯には、ふれておらず、歌の価値を問題にしている。しかし、多くの歌論書に伝承されていたのは、やはり多種類にわたる説話、伝説の存在が影響しているように思われる。

(2)性空上人の導き型

『拾遺集』の和歌の価値を客観的に述べた(1)と違い詞書に書かれている性空上人の名をもとに創造されていた話がこれである。説話集、草子類、謡曲、縁起とさまざまなジャンルに発展しているの、内容も多様化している。この(2)にあてはまる資料を内容で大別すると次のようになる。

A 袈裟下賜型

『古本説話集』『無名草子』『世継物語』がこれに

あたる。この型の話は、和泉式部が直接、性空上人に会わず、歌を送ると、その返事のかわりに袈裟をいたたく。歌を詠んだ理由について、はっきり書かれていないが、娘の死に関する話の後にこの話があるので、読者は自ら連想することになる。袈裟を使った点は伝承者の創作だと思われる、式部の歌の徳を強調するには効果があると考えられる。

B 参詣型

Aをさらに発展させた型である。『三国伝記』などがこれに含まれる。Aとの違いの一番大きな点は、式部自身が書写山へ出かけ、上人に会っている事である。そして「暗きより」の歌を詠んだ理由が具体的に扱われており、歌の徳というより、式部の信仰心や女人往生に重点をおいている。

さて、Bの中でも誓願寺の信仰に協力的なものと、関係のないものがある。前者は『誓願寺縁起』『和泉式部縁起』であり、後者は『御伽草子』である。（前者を、B'後者をB''とする。）

B'は『三国伝記』で上東門院のお供の立場であった式部を主人公にして書写山参詣を描いている。『三国伝記』では上人からの教えをうけるとそのまま都へ帰るのであるが、B'はその後、誓願寺へ行って出家する

という方向へ展開する。

B''の『御伽草子』は直接書写山に行くものの道命法師との不倫の関係を参詣原因にし、B'とは違う設定になっている。つまり、不倫の関係を中心テーマにしているの、書写山の説話を利用し、話の結び（出家）へとつなぐ役割をしていると思う。

これらの資料を整理すると次のようになる。

(1) 和歌批評型

『俊頼髓脳』『袋草紙』『無名抄』『西行上人談抄』『愚秘抄』『近來風體』『聞書集』『和歌講談』

(2) 性空上人の導き型

A 袈裟下賜型

『古本説話集』『無名草子』『世継物語』

B 参詣型

『三国伝記』

B' 『誓願寺縁起』『和泉式部縁起』

謡曲『書写詣』『誓願寺』

B'' 『御伽草子』

そして(2)の資料を具体的に比較すると八表二〇性空上人に関する説話の内容比較表(63頁参照)のようになり、A、B、B'、B''の関係をその表の次に図示した。

性空上人に関する説話の概要を説明してきたが、式部説話の複雑に入りこんだ成立がこれ一つをとってみてもよくわかると思う。説話作者の意図する方向に式部像を変化させようとしている点が見られ、特に誓願寺側の意図は強く感じられる。

㊦空也上人関係説話／表一⑬▽

性空上人の場合と同じく、式部の救いを求めた歌と空也上人の返歌から構成されている。ただ性空上人説話と違って『古事談』だけにしかみあたらない。

空也上人云はく

極楽はなほき人こそ参るなれ

まがれる事をながく留めよ

和泉式部

聖だに心に入れて導かば

まがるまがるも参りつきなむ

二首とも歌集には所収されておらず『拾遺集』『式部集』をはじめ多くの歌論書類に所収されていた「暗きより」の歌の普及との違いがその後の類話への発展のなかった原因の一つと考えられる。又、柳田国男『女性と民間伝承』にもあるように、空也上人と式部が直接贈答歌をやりとりする事は時代的に不可能であり、

その事からも真実と信じているものを伝承していく説話にはむかなかったとも考えられる。

㊦道命阿闍梨関係説話／表一⑭▽

式部と高僧の関係が描かれている説話は、性空上人空也上人をはじめ、いくつもある。これらの人々に式部は不安を訴え、救いを求めようとした。信仰心の厚い女性として描かれているこれらの説話に対して、道命阿闍梨との関係における式部は好色な女として登場する。

『古事談』『宇治拾遺物語』『雑談集』にあるこの説話は、道命が式部のもとに通って来た時、身を清める事もなく法華経を読んだので、下品の神、道祖神が聴聞に來た、という道命を主人公にした話である。式部は脇役の一人にすぎないが、事件のきっかけを作る重要な人物である。しかし、式部でなくてもこの話は成立する。なぜ式部が道命とむすびついたのか。山本節「道命と和泉式部の説話」には①二人が共に歌人として評価されていた事②二人が共に好色の人と考えられていた事③二人が共に法華経に深く関与していた事④天台淨土教系の聖と遊女との交渉の説話の一環としての位置づけが考えられる事の四つが理由としてあげ

られている。保昌と式部の説話が多く残っているのも、歌人としての共通性がその原因の一つにあげられた。道命との関係も多くの要素を持った必然的な結びつきであると考えられる。

この道祖神聴聞説話の他に、前に述べた道命阿闍梨との同事事件の話がある(『古今著聞集』)。これは、道祖神聴聞説話の成立原因である②二人の好色性、特に式部の好色性を強調したものと考えられる。さらに二人の関係を深く描いているのが御伽草子『和泉式部』である。この中で、二人は親子(式部が母親)と知らずに、恋におちる異常な関係にまで発展している。

さて、道命阿闍梨に関する説話の変遷をもう一度考えてみると『古事談』は好色性を描きながらも高僧としての道命の体面を保っているように思われる。

たとえば、『古事談』のこの説話が高僧伝の中に位置していることや、

その音声微妙にして、読経の時は、聞く人みな道心を発すと云々。

と道命の僧としてのすばらしさが説話の冒頭部分に出てくることなどから、このように考えられるのである。それに対して、時代が下る『宇治拾遺物語』は式部との交際の様子を具体的に書き、好色性を出している。

この傾向が『古今著聞集』『御伽草子』へと受け継がれていったと見る事ができるであろう。

③ 稻荷の童に関する説話(表一⑭)▽

道命説話と同じく好色性を感じさせる説話である。

式部が忍びで稻荷参りに行く途中、時雨が降り、稻刈りをしている童に襖を借りる。それがきっかけとなり童は式部に心を寄せ、都に式部を訪ね

時雨する稻荷の山のみぢ葉は

あをかりしより思ひそめてき

と歌を送る。

これが『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』に共通する部分の概要である。その後の記述に多少の違いがある。『十訓抄』『古今著聞集』では式部が童の和歌に感じて「おくへといひて、よびいれ」る姿が描かれている。しかし『沙石集』にはその後の二人については何も書かれていない。どの説話も、配列は和歌に感動する話の中に位置づけられているので、なぜ違いがあるのか疑問であるが、二人のその後の関係が書かれている『十訓抄』『古今著聞集』は歌徳の成果がより具体的に表現されていて、話の主導権は式部であり、彼女の好色性にもポイントをおいて話が展開している。

それに対して『沙石集』は式部の好色性をけずり、あくまで童の歌に重点をおき、おかしみを強調している。

さて、式部が稻荷に参詣した理由については、どの説話集にもふれられていない。しかし、他の神社でなく「稻荷参り」であった点に注意しなければならぬ。近藤喜博氏『稻荷信仰』によると、稻荷参りの目的は男女関係にあり、おもに参詣の下向中に、その目的がとげられるという説話が多い。そしてその説話の主人公は色好みと評されている男女である。式部の場合もこれにあてはまる。読者にとっては色好みの式部と稻荷神社とくれば、童との関係が深くなるのを期待するようになるであろう。その期待が謡曲『稻荷』『和泉式部』に発展していく原因になったと思われる。『稻荷』には男女和合の神_{（注1）}稻荷が、『和泉式部』には和歌の感動より童の恋心が描かれている。つまり「稻荷神社」は重要なキーワードになっている事がわかる。

㊦ 関寺の牛に関する説話／表一⑮▽

関寺に牛が現われた事件について式部が

聞きしより うしにころを かけながら

まだこそこえね あふさかのせき

と和歌を詠む話である。牛は仏教で尊ばれている動物

で、平穩な都の生活になれた貴族達にとって、ホットな話題となっただろう。『古本説話集』と『榮花物語』はほとんど同じ内容であり、先にあげた歌だけが記されている。これは実際の伝承の中心になっていたのが牛の出現とそれに関連した不思議な話であり、当時の評判の高さを表現する為に、有名人、式部の歌を使っただけであろうと考えられる。だから、この説話の原型に近い『関寺縁起』には式部の歌はみられない。

㊧ 「ふたつなく」の歌に関する説話／表一⑯▽

『宝物集』の「法華經の心」を詠んだ一群の歌の中に和泉式部の名で次のような歌があげられている。

ふたつなく みつなき法を 聞つれば

五ツの障 あらじとぞ思ふ

さて、この歌を基にしたと考えられる『三国伝記』の歌は、

二ツ無ク 三ツナキ法ト 説ク故ニ

五ノサハリ アラジトゾ思フ

とあり波線を引いた部分の変化によって、説教をする上人の側の作になっている。基になった『宝物集』の歌も、どの歌集にもみえず式部自身の作であるかは疑問である。また、女性の「五障」はよく和歌に読まれて

いるので、類歌もいくつかある。

この歌も、式部と仏教を結びつける創作だと考えられる。

①「あさましや」の歌について△表一⑩▽

「ふたつなく」の歌と同じく『宝物集』にある式部の歌、

浅ましや つるぎの枝の たはむ迄

こやつみのみの なるる成らん

は、地獄に關した説話群の中にあげられている。この歌は『金葉集』卷十や『和泉式部集』にも所収されており、式部自身の作とみてよいだろう。

「暗きより」の歌やこの歌に見られる式部は、自分の死後が相当気にかかっている様子で、それが性空上人説話や諸寺杜めぐりの説話へとむすびつく要因となっている。

以上、Ⅴにおいて仏教、神道関係の説話をいくつかあげてきたが、やはり式部と信仰を描いたものは他の説話に比較して多種多様である。仏教・神道と二種をあげたが、作品の中では混合して描かれており、本地垂迹の考え方を反映している。

さて、それら数多くの説話の中で、天台宗、法華經に關したものが多い。

貴族社会の浄土教は、摂関政治を背景にし、源信の観想念仏の影響によって現世的耽美的傾向を帯び、さらに法華經信仰や弥勒信仰も交わった雑信仰ともいふべきものであったが、末法思想が興ってからは、天台浄土教の阿弥陀信仰に統一されて厭世的な厭離穢土・欣求浄土の思想が発展するのである。（『平安朝文学事典』^(註1)）

平安時代末期には戦乱、武士の台頭、天災と世間の変化が激しく、人心の不安はたいへんなものであった。その不安に拍車をかけたのが末法思想であり、そのため、浄土教など新仏教の出現は著しかった。その時代の流れにのって、式部の説話も布教の例話として語られたであろうし、また実際に布教の場でなくても庶民の関心事の一つであったと考えられる。

そして女性が往生するという事は当時不可能と考えられていた。しかし、その考えを打ち消すいくつかの法華經説話^(註2)とともに、式部の説話は女性達のよりどころとなり、語り伝えられたと思う。

さて、この式部説話のうち仏教関係の資料をジャン

ル別にみても、それぞれに次のような特徴がみられよう。

(一)説話集 性空・空也・道命といった高僧との交渉や地獄、往生といった死後の不安を訴える姿は描かれているが、具体的にどこのお寺で尼になったとか修行した話はない。縁起類や物語草子には出てくる「式部の出家」が説話集に描かれていない。しかし後世の「式部出家譚」の式部出家の動機となった男女関係のトラブル（たとえば「保昌に冷たくされる」という設定が多く使われている事など）や一人娘との死別は説話集にくわしく述べられている。つまりこの保昌、あるいは、小式部との別れから無常を感じ、それが仏教説話へと結びつき出家へと創作したと考えられる。

その過渡期の作品の一つとして『三国伝記』が考えられる。たとえば性空上人との交渉の話は『古本説話集』に最初にみられるが、内容は『拾遺集』の詞書とほとんど変わらない。しかし『三国伝記』は書写山へ出かける描写、受け入れる側の寺の応対など話をおもしろくする傾向がみえる。この話の他に『三国伝記』は「式部御詠の事」の項でも、他の説話集では違う章にある話を一つに

まとめ、説話集を統合している型を作っている。

(二)歌論書 歌論書類はその目的の通り、式部の歌人としての業績の批評がおもなテーマになっている。中でも一番多いのは「暗きより」の歌に関するもので、歌の価値については賛否両論にわかれてはいるが式部の多くの歌の中で特にこの歌が話題にのぼっているのは、やはり女人往生の願望が世間に広くあったからと考えられる。

(三)縁起 縁起物は「式部」信仰「出家」成仏という関連が強く打ち出されている。特にこの傾向が強いのは『誓願寺縁起』と『和泉式部縁起』で『三国伝記』の記述をさらに進め、寺社側の意図が感じられる。

(四)物語 物語は縁起類と同じように説話をいくつかつなぎ合わせ一つの話を構成している。しかし、縁起類が寺社の霊力と式部の信仰のきっかけとしての娘の死に軽くふれているだけであるのに対して、物語はそのきっかけの部分に主眼を置いていようだ。それも話のおもしろさを求めたからである。たとえば『いづみしきふの物かたり』には幼少の頃に生き別れになった娘との不思議な再会が書かれ、読者の嗜好に合わせた創作であると

思う。

むすび

和泉式部の説話分布の状態を表に整理し、なぜ式部の説話が寺社信仰などと結びつき、現在まで数多く残ってきたかを考えてきた。資料として使用したものは説話集をはじめ、歌論書、物語、歌集、謡曲など幅広い分野にわたった。

もう一度、本論の内容を追ってみる。まず話を内容別に分類し（保昌関係、小式部関係、その他の人物関係、仏教・神道関係）それぞれの内容を検討した。全体的に内容を見渡してみると、「保昌に冷たくされ」「小式部と死別」する事が数多い仏教関係説話の前提条件となっていく。そして、その仏教説話は式部の実像とは別に、独立していく事がわかる。特に④性空上人説話の所で述べたように、寺社縁起などは寺社の都合にあわせて式部説話を利用している点が見られる。

また、どの項目もさまざまなジャンルの広がりがある。歌集や日記の中の式部の実像は、窓から家の中をのぞくように、ある一部分だけしか見られない。しかし、説話の世界では保昌に忘れられ、小式部に死別し、そ

の不安を信仰に救めようとする式部の全体像がうかんでくる。さらに式部の生涯を通して描こうとしたのが御伽草子であり、信仰面を強調して式部像を形成したのが縁起類である。また、美しい舞を伴う謡曲の世界では、言葉（和歌）をとり入れやすい式部説話を素材に発達した。このように説話から、草子、謡曲へと多方面に広がった故に、式部の伝説が地方に散在し、書きとめられて現在まで残ったのだと思われる。

もう一つ、式部説話が成立、伝承されてきた背景に女性の悲しい願いと力を感じる。

男性に隷属、依存せねばほとんど生きる術を持ち得なかった女性にとつては不安に慄き駆られる宿命が、大きな口を開けて待ち構えていた。

これは林雅彦「女人にとつて穢土と浄土」^(註13)の一部分である。式部の説話をながめていると、その根底に罪深い身であるかぎりながら、来世に救いを求めようとする女性達の姿がうかんでくる。表面的には、はなやかであった平安絵巻のかげには、女性の悲しい人生があった。それは時代が違い、環境が違っても女性の感情に訴えずにはいられなかったであろう。この説話が時代をこえて語り続けられてきた蔭には、そうした女性達の願いとエネルギーを感じるのである。

和泉式部説話についていろいろ考えてきたが、数多くの資料に出会うたびに、登場人物の素朴な表情に魅了された。源氏物語や、枕草子などにはそれ相応に華やかな美しさがあると思うが、説話には庶民の生活のにおいがあるような気がする。それは時代がたっても私達の生活との多くの共通点を持っており、身近な出来事であるような気がしてならない。

(注13) 「女人にとっての穢土と浄土」 林雅彦『ばれるが』

22号 昭51・1

(注1) 『日本説話文学索引』 境田四郎・和田克司編増補

昭49 清文堂

(注2) 『平安朝文学事典』 岡 一男編 昭47 東京堂

(注3) 『群書類従』 塙保己一編 昭4

(注4) 『日本歌学大系』 昭46 風間書房

(注5) 『日本文学史年表』 市古貞次編 昭51 桜楓社

(注6) 『群書解題』 続群書類従完成会編 昭37

(注7) 『今昔物語』 卷二十五 「大盗人袴垂」

(注8) 『女性と民間伝承』 『柳田国男全集』 第八 昭44

筑摩書房

(注9) 「道命と和泉式部の説話」 山本節 『国語と国文学』

昭55・3 東大国語国文学会

(注10) 『稻荷信仰』 近藤喜博 昭43 塙書房

(注11) (注2) に同じ

(注12) 道成寺説話(『今昔物語』卷十四) など

〈表一〉 —— 和 泉 式 部 関 係 説 話 表 ——

[illegible]

〈表二〉 性空上人に関する説話の内容比較表

項目 資料	書写山に 行った人	けさをもら ったか?	「暗きより」の 歌を詠んだ理由	書写山参詣の 理由	性空上人の教え の内容	書写山参詣の後	一遍上人の話 の有無
拾遺集	×	×	×	×	×	×	×
古本説話集	×	○	直接の記載はないが「小式部の死」の語の後にこの話がある。	×	×	×	×
無名草子	×	○	同上	×	×	×	×
世継物語	×	○	同上	×	×	×	×
三国伝記 (平仮名本)	上東門院 十おとも (7人)	×	性空上人が会ってくれないので願いを歌にこめた。	「相看讎悔」	1. 法華経を下さる 2. 「ふたつなく つな五のぞはりあ らじとぞ思ふ」	都へ帰る	×
誓願寺縁起	式部 十おとも (8人)	×	同上	「出離の要法を たつね求めん」	1. 八幡山に行きなさい。 2. 「ふたつなく つな五のぞはりあ らじとぞ思ふ」	1. 老僧の指示により 誓願寺へ(8月半 ば) 2. 老尼の歌 「あみだ山といふの より外は津の国の なにはのこととも しかりぬべし」 3. 出家	○(性空上人の話 と聞いて所収さ れてはいない)
和泉式部縁起	式部 十女房 (人数記載) なし	×	同上	「後の世のこと を尋 御法のを しへをうけむ」	同上	1. 同上 (8月20日) 2. 同上 3. 同上	○「上」には性 空上人の話 「下」は一遍 上人の話

(次ページへ続く)

謡曲 写 詣」 「書	式部 十おとも	×	性空上人が会っ てくれないので 願いを歌にこめ た。	「後の世を祈ら ん」	1. 法華経をうける	都へ帰る	×
謡曲 「誓 願 寺」	×	×	×	×	×	×	○
御 伽 草 紙	式部	×	得心の時に詠 んだ	親子と知らずに 道命法師と関係 をもつ。	×	出家	×

拾遺集

⇒

A群

古本説話集
↓
無名草子
↓
世継物語

⇒

B群

三 国 伝 記 →

B'

御 伽 草 紙

B'

誓 願 寺 縁 起

↓
和泉式部縁起

謡曲
「誓願寺」
「書写詣」